

「災害に備える努力を」

山梨県 北杜市立甲陵中学校 3年 矢澤 茉璃奈

最近のニュースを見ていると、地震・洪水・猛暑など、自然災害に困るものが目立ちます。現代の様に、生活レベルが向上し、科学技術が発達していても、大自然の威力に打ち勝つ事は、なかなか困難です。

みなさんがもし、「防災の日はいつですか」と聞かれたら多分「9月1日」と答えるでしょう。しかし私は違います。私は「7月19日」と答えます。7月19日は、私が住んでいる諏訪湖周辺の人達にとって、忘れてはならない日だからです。今から7年前の2006年、岡谷市では降り続いた雨が災いして、豪雨・土石流災害が起きました。

当時の状況は、2006年7月15日から24日にかけて、活動が活発化した梅雨前線が本州から九州にかけて停滞し、九州・山陰・北陸・長野県などで記録的な大雨となりました。そのうち、19日は1時間に31ミリメートルを記録する雨で、岡谷では土石崩壊・土石流が発生しました。それは、水分が多い黒色泥流だったそうです。そして、半径1キロメートル内の標高905～1,045メートルに集中しておきました。人的被害をもたらした土石流発生の原因は色々な要素が重なり合っていた、と当時の資料に記述されています。そこには素因と誘因という言葉でまとめられていました。（長野県建設部砂防課による資料）

素因としては、地形・地質状況に於いては、崩落地は谷状の急斜面であり、土石流を減勢できなかったこと。地質は凝灰角れき岩が基盤であり、上位には浸透した降雨をため込むローム質の土壤が存在していたこと。植生に於いては崩壊地には、カラマツ・アカマツを中心とした平均樹高10メートル以上の樹木が生育していたが、崩壊面は根系より深く、今回の発生抑制効果がなかったこと等があげられています。

誘因としては、岡谷市周辺の当時の雨量が2日間で273ミリメートルという観測史上第1位、正しく未曾有の豪雨だったことで森林の保水能力を上回り、土石流が発生したと分析されています。

私が注目したのは、もう一つの要因です。岡谷市は、過去百数十年間にわたって土砂災害の経験のない・災害の記録が伝承されてこなかった地域、いわゆる土砂災害の空白域であった、という点です。地域住民とともに市町村も土砂災害を想定できず、水防活動中にも土石流が発生して、被災したという点です。単なる土砂崩れではない、土石流に対する恐ろしさを熟知していなかったことにあります。当時の行政の避難勧告や住民の避難状況も十分ではなかったと思います。

今回、私は「土砂災害」という作文テーマを選んで、土砂災害の恐ろしさについて改めて学びたいきっかけになりました。小学校の社会の授業で、「土砂崩れは森林破壊が進んでいるから起こる」と習いました。だから私は、「長野県は山が多く、たくさんの木で覆われているため土砂崩れの心配はないんだな」と勝手に解釈していました。しかし、実際には何回か起こっていたのです。2006年の例は、崩壊面が樹木の根系よりも深かったので、土砂崩れ抑制は効果がなかったということです。ですから、木がどんなに植えてあっても、絶対木が役に立つとは限らないことがわかりました。すなわち、何かに頼ってばかりではなく、まず私達住民が自分の地域を知り、災害に備える努力をしなければならないと思います。小学校の時に配布された「社会科の資料集」には土砂崩れのおそろしさや対策が掲載されていましたが、私は一切興味を示さず、読んだことがありませんでした。だからもし災害に巻き込まれる様な事があれば「読んでおけばよかった。」と後悔すると思います。今後は、もしもということを考え、その様な災害の対策にも目をむけていかなければならないと思います。もちろん、災害が起きないことが一番ですが、自然の脅威は人間が予測できるものではありません。ですから、過去の経験を生かして、もし起きてしまっても、人を巻き込まず被害を小さくできる様、行政や地域が一致協力していかなければならないと思います。